

序論)

今日から私達は受難週を迎えます。受難週とは【主】イエスキリストが受けられた十字架の苦しみを覚え、悔い改めるべきことを悔い改め、その贖いを心から感謝する週のことです。

欧米ではこの期間に教会で行われる特別な集会に参加したり、断食をしたり、キリストの十字架の犠牲と愛を覚えて社会奉仕活動をしたりするそうです。

私達の教会は今週特別な集会を平日に開いたりしません。せめて受難週が始まる今日、キリストの十字架の意味とその十字架を覚えるものがどのように生きるべきなのかを聖書から教えられていきたいと思えます。

文脈)

先程、ペテロの手紙とマルコの福音書を読みました。マルコの福音書はイエス様の十字架を覚えるためにイエス様の受難の一部を抜粋して読みましたが、今日のメッセージのメインの聖書箇所はペテロの手紙の方となります。

今日読んだ箇所には、イエス様がどのように十字架の苦しみを受け取られたのかが書かれており、このみことばは 18 節にある「しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。」という文脈の中で語られています。

もともと、この手紙が書かれた当時、キリスト教徒たちはローマ帝国による迫害の中にありました。そのため苦難や試練の中にある人々たちにたいして、信仰を守り抜くように勧め、愛の実践を励ますためにペテロによって書かれたのがこの手紙です。多くのキリスト教徒が苦難の中にいたのですが、特にしもべと訳されている奴隷の立場の人たちはさらに厳しい状況にいました。

私達がイメージする奴隷というのは、鎖などに繋がれて日々ムチを打たれているようなイメージがありますが、当時の奴隷の中には主人の財産を任せられる程度の自由が与えられている奴隷や、所謂肉体労働者として使われていた奴隷などがおり、必ずしも鎖に繋がれていじめられていたわけではありません。そうはいっても、当時は基本的人権などという考えはなく奴隷は主人の所有物の一つでしかないのです。横暴な主人に支配されていた奴隷は相当ひどい目に合っていたようです。ましてや、当時迫害の対象となっていたキリスト教の信仰をもっているとバレてしまったら、その奴隷は本当に酷い扱いを受けていたでしょう。

不当な主人にも従いなさい)

ペテロはそんな不遇な環境にある奴隷のクリスチャンに向かって、「横暴な主人から解放されるように祈りなさい」というのではなく、「横暴な主人に対しても従いなさい」と言っています。18節を読んでみましょう。

**2:18** しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。

これは酷い話ですよ。現代に当てはめるのならばまともに残業代も出してもらえないようなブラック企業で仕事をしていて、上司が理不尽な命令ばかりをする会社にいたとしても、そこから開放されることではなく、その理不尽な上司に従うようにしなさい。と言っているようなものです。

ペテロはなぜ、このようなことを命じているのでしょうか。

それは、不当な苦しみに会いながらも悲しみに堪えて良心に恥じない正しい行いをするのならば、神様がそれを喜んでくださるからです。

みなさん、神様は横暴な主人であったとしても、従順に従う者を喜ばれるお方なのです。

なぜでしょうか。なぜ神様は奴隷に従うことを喜ばれるのでしょうか。それは、その人が奴隷のように従う立場にいること自体が神様の召しであり、御心だからです。21節を読んでみましょう。

**2:21** あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

みなさん、「召し」とはなんでしょうか。「召し」とは神様がその人に特別な立場や役割を与えるためにその人を招くことであり、神様が計画された役割への任命のことです。

なんとペテロは、「あなたがたが奴隷として神様に任命されたのは、横暴な主人であったとしても従うためなのです」と言っているのです。みなさん、このペテロのことばを納得して受け入れることができるでしょうか。誰だって、奴隷として召されたい。奴隷として任命されたいとは思いません。ましてや、横暴な主人に従う奴隷になるために神様に任命されたといっても納得はできません。なぜ、奴隷の人たちはその役割が与えられたのでしょうか。

それは横暴な主人に従うということが第一の役割ではなくって、キリストの受難の模範に従うものになるということが彼らの第一の役割であり、そのために彼らは

奴隷として召されたからです。

みなさん、世の中はすべての人が管理者ではありません。すべての人が経営者ではありません。そして、すべての人が政治家ではありません。国や組織のリーダーとして立たされる人もいるけれども、多くの人はそういった人たちに従う立場が与えられます。なぜ、そのような立場が与えられるかというと、父なる神様のご計画に徹底的に従われたキリストの歩みにその人が従う者となるためなのです。キリストと同じようになるために、従う者として私達は召されたのです。

だから、聖書は善良な主人であったとしても、横暴な主人であったとしても、キリストの模範に倣うために、この世の主人に従いなさい。と聖書は命じるのです。

### キリストの模範)

ではみなさん、その私達が倣うべきキリストはどのような模範を示されたのでしょうか。キリストが示された模範。それが十字架なのです。22 節から 24 節の前半を読んでみましょう。

**2:22** キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

**2:23** ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。

**2:24a** そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。

イエス様には罪がありませんでした。今日は読みませんでしたけども、ピラトというエルサレム地域を任されていたローマの総督は、イエス様には罪がないことがわかっていたので、なんとかイエス様を解放しようと努力していました。

例えば、イエス様を訴えている人たちの溜飲をさげるために、イエス様をムチでうってボロボロにして、ここまで痛めつけたのだからもういいでしょ？ というつもりでその姿をみせたり、当時、その時期に一人捕まっている囚人を解放するという習慣があったので、暴動・殺人を犯したバラバ・イエスという人と主イエスキリストを並べて、どっちを解放するか？ と人々に聞いたりして、なんとか人々がイエス様を選んで、イエス様を解放するようにしようとしたのです。しかし、人々はイエス様ではなく、その殺人犯であるバラバ・イエスの解放を選んだのです。他にもイエス様自身が無罪を主張できるチャンスを与えようとピラトはしましたが、イ

イエスは沈黙を貫いて自分の無罪を主張しようとはしませんでした。

そのようなことが書かれている聖書を見ると、イエスを十字架につけることに決めたピラトは結構いい人のように見えます。しかし、実際にはそんなにいい人ではないのですが、一生懸命、イエスの無罪を主張して解放しようとしている姿を見ると、いい人のように見えるのです。では、なんでピラトがそこまでしてイエスを解放しようとしたかというところ、イエスには罪がなかったからなのです。

イエスは罪がないけども、あえて沈黙を続けて、自分を犠牲にするようにしました。23節には「正しくさばかれる方にお任せになりました。」とありますけども、これは完全に正しい神様の御判断に自分の身を委ねた。ということです。

狭い視点でみるのならば罪のないイエスが殺されるということは正しいことではありません。でも、私達の罪を赦すという義を神様が行うためには、誰かが私達の代わりに誰かがその罪を背負って死ななければならなかったのです。だから、私達の罪を赦しつつ、同時に罪に対する裁きもしっかり実行するという2つの義を正しく実行するために、正しいさばきをする神様は、イエスを私達の身代わりとして裁くことをきめられ、イエスはその神様の御判断に自分の身をゆだねられたのです。

自分の正しさではなく、神様のご計画に委ねる。それがイエスの模範でした。

### イエスの模範によって与えられたもの)

そして、このイエスの犠牲はなんのためになされたかというところ、24節の中盤にこのように書かれています。

**2:24b** それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。

罪に支配されていた私達が罪から離れ、神様の義を実行して生きる。そのような存在になるために、イエスは十字架の上に死なれたのです。

イエスの十字架は、みなさんを罪から離れさせてくださいます。

イエスの十字架は、みなさんに神の義を実行する人生を与えてくださいます。

だから、イエスは十字架の上で死なれたのです。

とはいっても、私達は弱い者で心に傷を抱えていたりすると、正しい歩みができない。前向きな歩みができない。そういうことがあります。

実際、小さいころ親から暴力を振るわれて育った人は、大きくなっても人を信頼したり、信用したり、愛したりすることが難しくなったりします。小さいころ深い傷を追った人は、大きくなっても夢や希望がもてなくなったりします。

心に傷があると、私達は神様が喜ばれるような義の行いをなかなかすることができなかつたりするのです。だから、イエス様はただ十字架で死ぬだけではなくって、ボロボロに傷つけられて、ムチうたれて、その上で、イエス様は十字架で死なれたのです。

みなさん、思い出してみましよう。イエス様が十字架にかかるまでにどのような痛みを受けられたのでしょうか。まずは12弟子の一人であるユダに裏切られます。次にイエス様がゲッセマネの園で祈っていても、弟子たちはイエス様の苦しみに共感することもなく眠りこけていました。さらには弟子たちの中でも最も熱心だったペテロに3回も知らないといわれてしまい、人々から冤罪を着せられ、ピラトの命令によって肌をえぐりだすような棘がついたムチをうたれ、兵隊たちによって茨の冠を被せられ、つばをはきつけられ、着物を奪われ、人々にさんざん馬鹿にされて十字架に付けられたのです。

イエス様が受けた痛みは十字架だけではなかった。裏切り、孤独、否定、侮辱、暴力、ののしり、そのようなあらゆる痛みを受けた後、イエス様は十字架にかけられたのです。なぜ、そこまで徹底的に苦しめられなければいけなかったのでしょうか？それは私達が癒やされるためです。24節後半を読みます。

**2:24c** キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

主のみ痛みは、傷ついた私達を癒やすためでした。私達の魂の傷、心の傷を癒やして、私達が義のために生きるようにするために、イエス様は徹底的な痛みに合わせてくれたのです。

だから、この御方の十字架によって救われた私達はどのような存在かというところ。25節。

**2:25** あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

私達の魂を養い、導き、守ってくださる牧者。それが主イエスキリストです。私達が、この御方の羊として、この御方に導かれるようになるために、そして、

この御方に従うようになるために、イエス様は十字架にかかられました。

だから、この御方に救われたしもべは、イエス様と同じように従うものとしての歩みをするのです。

もちろん、私達は罪あるものですから、イエス様のように誰かの罪の身代わりになることはできません。でも、イエス様と同じように従うものとして歩むとき、神様はその従うしもべの歩みを通して、キリストの栄光を表してくださるのです。

主は、私達がキリストに倣い、従うしもべとしての生き方をするを通して、キリストによって救われる人、キリストによって癒される人をさらに増やしてください。

実際、暴力を振るう主人を愛し、徹底的に従うことを通してその主人がすぐわれたりとか、職場の横暴な上司に従いながらもキリスト者として謙遜に歩み続けることを通して、職場の人が救われたりとか、「あの人、あんなにつらい状況なのになんで喜んで従ってられるんだろう。」というノンクリスチャンたちの疑問から、その人が救われる人という証しはいっぱいあります。

だから、主は、私達をしもべとして召し、どんな相手にも従う姿を喜ばれるのです。

## まとめ)

みなさん、イエスキリストは、みなさんが罪から離れ、義に生きるために十字架につけられました。でも、私達の魂が傷ついているとき、私達は義を行うことができません。だから、そんな私達の魂を癒やすために、キリストはただ十字架にかかるだけでなく、打たれ傷つけられ、多くの苦しみを受けた上で死なれたのです。

キリストの苦しみは、みなさんの魂をいやしてくださいます。

今、義を行うために癒やしが必要な人がいるならば主の十字架にすがりましょう。

すでに癒やされて義に歩む力が与えられているのならば、キリストの十字架の模範を見上げながら、しもべとしての従う歩みをしていきましょう。

主は私達を罪から離し、義の歩みをさせてくださるお方です。